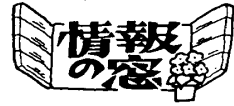


AIS-Association for Information Systems (国際情報システム学会)



真鍋 龍太郎 (文教大学)

1. 情報システム学

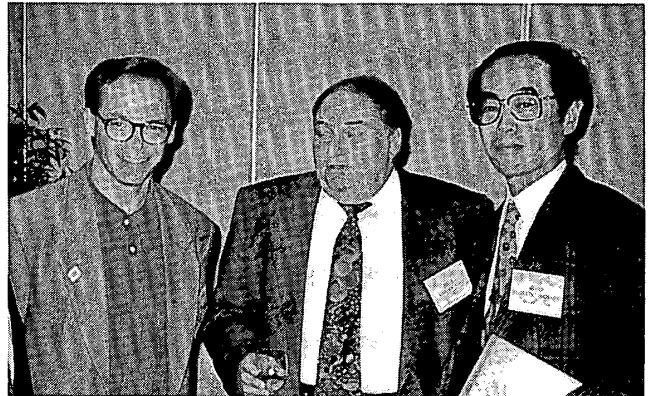
世界各国の情報システムの研究者、教育者が集まって「情報システム」を専ら扱う国際規模の学会組織 AIS (Association for Information Systems) が昨年初めにできた。会員は全世界にまたがっている。なぜ今「情報システム」の学会組織が新たに要るのだろうか？

最大の動機は「情報システム」学のアイデンティティを確立しようという動きである。「情報システム」という「コンピュータですね」という返事が戻ってくる事が多く、この分野の専門家たちを落胆させ続けてきた。情報システムとは、個人や組織がある目的を達しようとして、情報を集め、蓄積し、処理し、伝達するための仕組み、あるいは仕事のしかたで、それを支援するものとして情報・通信の機構が作られ利用されている。世の中の眼は仕事の仕組みの方にはなかなか向いてくれず、狭義の機械的な機構のみが情報システムだと誤認されがちなのである。

学界にもこれが反映されていて、上の意味での情報システムを専ら扱う学会組織は世界にも少ない。イギリスに UK Systems Society がある。日本では経営情報学会ができた。アメリカには図書館情報学が中心の学会がある。計算機学会の分科会だが、毎年3日にわたる研究発表会を開いているオーストラリアの例もある。全く学会のない国も多い。そこで、情報システムに関心が高い研究者の組織の AIS が、国際情報システム学会議 ICIS を背景として1995年1月に発足した。

2. 国際情報システム学会議 ICIS

情報システム全般のグローバルで最も大きな会議 ICIS (アイシスと読む。International Conference on Information Systems) は16年前からある。これは1つの学会の会議ではない。ACM のビジネス情報技術部会、INFORMS (アメリカ OR 学会と経営科学協会 TIMS の95年の合併後の学会) の情報システム部会、IFIP の TC8 (情報システム)、The Society for Information Management 等の代表と、前年、当年、翌年の会議のチェアたちが執行委員会を作り、毎年12月第



95年12月アムステルダムの ICIS で、左から G. Gable, W. A. King, 筆者

2週に、北アメリカで、3年に1回はヨーロッパで開いている。

これには情報システムに関心を持つ学者が世界中から集まる。日本からも毎年何人かが出席する。筆者も93年オーランド、94年バンクーバー、95年アムステルダムの会議に参加した。常に千名前後の人々が集まる。93年にはジョージア大の R. Watson 先生と浦昭二先生 (新潟国際情報大) が企画して、日本の IS 教育、研究、実践に関するパネルが行われた。

この会議では、招待講演あるいは基調講演、論文発表のセッションなど通常の会議形式の他に、パネル討論と研究経過の中間報告を議論するセッションが多数ある。さらに、多くの出版社の教科書、研究書の展示やソフトのデモもあり、展示ホールを一巡するだけで、情報技術の最新の動向が分かる。研究発表の会場、展示ブースやロビー、レセプションなどで色々な人々に会えることが、毎年大勢の参加者を集めている理由のひとつでもある。若手の育成にも力を入れており、博士課程の学生40名が学位論文のプロポーザルをもとに討論する会が ICIS の直前に行われる。

3. AIS の発足

ICIS のロビーで1993年あたりから、情報システムの新たな学会組織を作ることが相談されてきた。大学経営層の情報システムへの理解も乏しく経営の悪化でリストラの対象にされたとか、Ph.D 取得者の就職への

理解が少ないという声もきっかけになっている。

1994年の夏には学会の骨格案ができて会員募集が始まり、11-12月に役員選挙が行われた。94年12月のバンクーバーでのICISの折に発起人や理事などのビジネス・ミーティングが開かれ、翌95年1月にAISが発足した。筆者はこの会合に発起人のひとり倉谷好郎先生の代りに出席し、それ以来日本の会員の窓口役を務めている。目下の会員は1600名余り、日本からはまだ30名ほど。国際的に発信したり交流をしたい方々が多数加入して下さることを願っている。

冒頭に書いたような意味で情報システムを考えている人々が集まっているので、情報システムが使われる場や、目的、組織環境での位置づけなどに関心を持っている人が多く、ORの世界で知られている人も会員に多い。学会発足のために最も動いたPittsburgh大のWilliam A. Kingさんもその1人。89年大阪のTIMSに来日されたのでご記憶の方もあろう(写真中央)。アメリカ国内のみならず、ヨーロッパの中核、アジアの若手を取りまとめて、グローバルな組織を作った。

組織のグローバル化のためにいくつかの策がある。理事会は会長、前年度会長、次年度会長、財務理事Secretary, 担当職務のある7人の副会長と地域代表の理事で構成する。世界をAmericas, Europe-Africa-MidEast, Asia-Pacificの3地域に分けて、各地域から2名の理事を選出する。また、会長は3地域から輪番に選ぶ。初代(95年)はアメリカのKingさん、96年は国際経済・経営会議で来日経験もあるデンマークのNiels Bjorn-Andersenさん、97年は既にオーストラリアのRon Weberさんが選ばれている。前年、翌年の会長も理事だから各地域から常に最低3名が理事会にいる。会長以外の理事の任期は2年。現在Asia-Pacific選出理事はオーストラリアのRoger Clarkeさん(96年末まで)とシンガポールのMargaret Tanさん(97年末まで)である。

役員選挙でも、3地域から2、3名ずつの候補者指名委員会を作り、各委員から出された候補者を検討して最終的に各ポジションに2名の候補者を残して、全会員で投票している。

筆者はこの指名委員を務めたが、この委員会も理事会も、あるいは担当副会長が必要に応じて作る委員会も専ら電子会議で、ICISが最大あるいは唯一の顔合せの場になっている。各種の連絡も印刷物ではなく、電子メールやメイリング・リストが使われている。

事務局はKing前会長がExecutive Directorも努め

て、ピッツバーグ大学に置いている。学会は普通は会誌を発行するが、AISは発行してない。会費(96年はUS\$80)に\$7.5から\$12.5の追加で、次のうちの1冊を購読できるようにしている：

—MIS Quarterly

—J. of Organizational Computing

—Information Systems (Data Bases : Their Creation, Management and Utilization)

研究発表会はAISの全体規模のものは開かず、ICISの最大のサポータになっている。ICISは出席者が多く論文の受理率も15~20%と極めて低い。そこで、発表しやすく、参加もしやすく、地域ごとに独自の会議を開くことを奨めている。アメリカ地域は昨年からは毎年夏に開き始めた。ヨーロッパは数年前から独自の会議を開いておりこれが地域会議になった。アジア太平洋地域では95年に台湾でT. P. Liang教授を中心にPan Pacific Conference on Information Systems (PACIS)という会議を開き、その第2回を昨年夏シンガポールで開いた。これがAISの地域会議になることになった。

4. アジア太平洋情報システム会議 PACIS

昨年の6月29日から7月3日の第2回には、日本からも、パネリスト、一般発表、チュートリアル講師を含み13名参加した。この折りに各国の代表が集まって熱心に議論し、PACIS(パクスと読む)を今後はPacific-Asia Conference on I. S. と変えてAISの地域会議として位置づけることになった。今回は97年に開き、以後は毎年開く。また各国から1名ずつの委員で構成するExecutive Committeeを作るなどの組織もできた。

今回は97年4月2-6日にオーストラリアのブリスベンで開く。筆者の友人のGuy Gableさん(写真左, Queensland Univ. of Tech.)がプログラムCo-chairを務め、彼を中心に準備が進んでいる。論文発表の締切りは10月15日で、多くの方々の参加を期待している。

誰かが声を出してないと我が国が無視されてしまうので、AIS、PACISとも今のところ小生がボランティアに代表役を勤めている。AISの入会の情報、ICIS、PACISのCall for Papersなどをご希望の方は、筆者にご連絡いただきたい。

まなべ りゅうたろう (文教大学情報学部)

E-mail : manabe@shonan.bunkyo.ac.jp,

Fax. 0467-54-3721